

# 坂出市内遺跡発掘調査報告書

平成 11 年度国庫補助事業報告書

鶴ヶ峯古墳

讃岐国府跡(開法寺遺跡)

讃岐国府跡

2000 年

坂出市教育委員会

## はじめに

本年で9年目となる坂出市内遺跡発掘調査は、各種開発事業と遺跡保護の調整上、事前の確認調査が必要不可欠であるとの認識から、市内約260箇所の遺跡を対象に発掘調査事業を継続しているものであります。また近年は、開発関係以外でも重要と考えられる遺跡の確認調査も開始しております。

今年度は、土砂採取事業に伴う鶴ヶ峯古墳の範囲確認調査のほか、讃岐国府跡内での2件の個人住宅建設に伴う確認調査を行いました。

特に讃岐国府跡内の5103番3における調査では、古代寺院開法寺の遺跡の一部と考えられる礎石群が良好な状態で発見され、今後の開法寺の範囲を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

これらの貴重な発見も、地権者の皆様の多大な御協力がなければ、得られなかつたものであり、調査を無事終了することができたのも、一重に地権者の方々をはじめとする地元関係者の皆様の御協力があつてのことと考えております。ここに記して謝意を表したいと思います。

平成12年3月31日

坂出市教育委員会

教育長 中井富普

## 例　　言

1. 本書は、坂出市教育委員会が平成11年度国庫補助事業として実施した、坂出市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、鶴ヶ峯古墳と讃岐国府跡を対象とした。
3. 発掘調査、及び本書の執筆、遺物整理、復元実測については、社会教育課今井和彦が担当し、編集、校正は社会教育課係長前川昌也が担当した。
4. 讃岐国府跡での礎石群の調査に際して、川畠迪氏、田村久雄氏、香川大学教授丹羽祐一氏、岡山理大助教師亀田修一氏、渡部明夫氏、笠川龍一氏、片桐孝浩氏、東信男氏、川畠聰氏、森下英治氏、ほか香川県埋蔵文化財センター等多くの方々の指導を得た。記して、感謝申し上げたい。
5. 本書の実測図の縮尺はスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は全て磁針方位で示した。
6. 出土遺物及び図面は坂出市郷土資料館にて保管している。
7. 遺物・遺構の資料について、川畠迪氏など、多くの方々の協力と助言を頂いた。記して謝意を表する。
8. 掲図には坂出市都市計画図を使用したほか、国土地理院の25,000分の1を一部使用した。
9. 讃岐国府跡での礎石群の調査に際しては、炎天下での長期作業を厭わず、作業に従事して下さった皆様に対して敬意を表したい。  
　　発掘作業　　山田義範、稻毛幸晴、田村久雄、山田孝行  
　　調査補助　　野田知昌、阪根陽子
10. 各調査の際、地権者である山橋建設株式会社、岡野義隆氏、大林実氏の協力を得た。特に讃岐国府跡の礎石群の調査に際して、事業主の岡野隆二、隆美氏には、礎石群の保護のため、造成時の設計変更の実施にはじまり、文化財保護に多大な協力を得た。ここに記して感謝申し上げたい。

## 目 次

第Ⅰ章	坂出市内遺跡発掘調査事業概要	1 p
第Ⅱ章	鶴ヶ峯古墳発掘調査	2～8 p
	1. 調査に至る経緯	2 p
	2. 遺跡の立地と環境	2 p
	3. 調査状況	4 p
	4. 主体部状況	4 p
	5. まとめ	4 p
第Ⅲ章	讃岐国府跡（開法寺遺跡）発掘調査	9～23p
	1. 調査に至る経緯	9 p
	2. 遺跡の立地と環境	9 p
	3. 調査状況	12p
	4. 磐石状況	14p
	5. 調査区土層	14p
	5. 出土遺物	17p
第Ⅳ章	讃岐国府跡 5061-2 発掘調査	24～32p
	1. 調査に至る経緯	24p
	2. 遺跡の立地と環境	24p
	3. 調査状況	26p
	4. 出土遺物	27p
第Ⅴ章	まとめ	33p

## 写 真 目 次

### 鶴ヶ峯古墳

1. 調査前状況	5p
2. 調査作業状況	5p
3. 西トレンチ精査状況	5p
4. 南トレンチ列石状況	6p
5. 南トレンチ列石状況	6p
6. 東トレンチ列石検出状況	6p
7. 東トレンチ列石精査状況	7p
8. 第一主体部検出状況	7p
9. 第一主体部検出状況	7p
10. 第一主体部検出状況	8p
11. 第二主体部検出状況	8p
12. 第二主体部検出状況	8p

### 讃岐国府跡5103-3

1. 調査区遠景	19p
2. 表土掘削状況	19p
3. 磁石検出状況	19p
4. 磁石検出状況南北	20p
5. B 3 磁石横出土土師質陶	20p
6. B 3 磁石横出土凝灰岩	20p
7. 南西角瓦集積状況	21p
8. B 1 磁石掘方内出土状況	21p
9. B 1 磁石掘方内出土瓦	21p
10. B 4 磁石掘方内平瓦出土状況	22p
11. B 4 東瓦片出土状況	22p
12. C 5 磁石抜き取り跡検出状況	22p
13. 検出磁石全景	23p
14. 検出磁石全景	23p
15. 現地説明会風景	23p

## 写 真 目 次

## 挿 図 目 次

### 讃岐国府跡5061-2

1. 調査区遠景	29p
2. 調査前状況	29p
3. 掘削作業状況	29p
4. 遺構検出状況	30p
5. 遺構検出状況	30p
6. 土層状況	30p
7. S X 0 1 土器溜まり状況	31p
8. S T 0 1 土穴墓精査状況	31p
9. S T 0 1 土穴墓内遺物状況	31p
10. S T 0 1 土穴墓下層状況	32p
11. 完掘状況	32p
12. 埋め戻し状況	32p

1. 鶴ヶ峯古墳周辺遺跡位置図	3 p
2. 墳丘測量図	3 p
3. 周辺遺跡位置図	10p
4. 讃岐国府跡調査位置図	10p
5. 開法寺遺構配置図	11p
6. 磁石配置図	13p
7. 調査区土層図	15p
8. 磁石断面図	16p
9. 出土遺物実測図	18p
10. 調査位置図	27p
11. 出土遺物実測図	27p
12. 遺構配置図・土層図	28p

## 第1章 平成11年度坂出市内遺跡発掘調査事業概要

今年度の市内遺跡調査は、市内の東南に位置する鶴ヶ峯古墳と讃岐国府跡内の開発に伴う発掘を実施した。

国庫補助申請については、平成11年4月21日付けで提出したが、讃岐国府跡内の礎石群の発見に伴う調査の後、平成11年10月18日付けにて計画承認変更申請を行った。

鶴ヶ峯古墳の調査は、この古墳の位置する山林を所有する山極建設株式会社が、同地区で採土計画を検討するに当たり、鶴ヶ峯古墳を採土計画地から外して保存する必要から、古墳の範囲を明確にしてほしい旨の遺跡照会があった。これを受け、5月21日に現地の伐採を実施し、6月15日より調査を開始した。調査は古墳に到る進入道が無いことから、山林の境界付近を伐開して進入道としながら、マウンドと推察される地点を中心に十字のトレンチを設定して範囲の確認を行った。

鶴ヶ峯古墳の事前資料では葺き石が一部露出しており、四隅突出形の墳丘の可能性も指摘されてもいたが、資料に乏しい前期古墳であった。範囲については、溝など明確な遺構は検出されなかったが、一部に列石が円形に並ぶことや、丘陵の傾斜変換点から、直径11mほどの円墳であることが確認された。また墳頂部に安山岩の板石が露出しており、精査を行ったところ石棺の蓋であることが確認された。この石棺北付近より、更にもう一基の石棺の蓋石が検出されたことから、二基の石棺をもつ円墳であることが確認された。保存については、この古墳の範囲を外した採土計画になるよう回答した。

讃岐国府跡での調査は2件あり、どちらも個人住宅建設に伴う確認調査であった。府中町5015番3の開発については、6月頃より電話照会があり、秋頃の工事予定であったが、7月に入り、夏頃には工事着手する予定になったことから、急遽、文化財保護法57条の2の届出を提出してもらうとともに、事前の確認調査を実施した。

調査を開始してすぐに安山岩の石が数個検出され、さらに石の並びに沿ってトレンチを設定したところ、次々と石が並び始め、遺物の多くに瓦片が出土することから、国府関連遺跡でも開法寺の関連遺構である可能性が高まった。ところで、これらの礎石群の大半が浅い位置で検出されたことから、住宅基礎部の掘削や造成時の擁壁工事の振削と礎石の保護調整の必要が生じた。このため、地権者を含めた開発側と設計変更を協議し、遺跡の保護のために、境界コンクリートの深度を浅くする工法に変更して建設を実施することとなった。遺跡の発見についてはマスコミ等でも取り上げられ、地権者もその重要性には十分な理解を示していただけたことから現位置での礎石の保存が可能となった。今回の個人住宅の建設は実施されたが、将来の整備等が計画された際は、再度その保存活用について協議ができることとなった。

もう1件の調査は国府の石碑のすぐ東に位置する地点で、周辺の調査結果では溝や柱穴といった遺構が残ることが推察された。調査では、溝、柱穴のほかに、土器溜まりや土坑墓も検出されたが、時期的には中世頃の遺構であり、国府と直接結びつく遺構は発見されなかった。遺構面と住宅基礎の掘削深度も問題ないものであることから、調査終了後住宅建設が実施されている。

今年度の発掘調査は総面積216.5m<sup>2</sup>であり、開発に伴う事前の確認調査が主で、城山城址などの重要遺構の確認調査は未調査となつたが、今回の開法寺遺跡の礎石の発見から、今後は周辺の遺跡確認調査を実施する予定となつた。

## 第Ⅱ章 鶴ヶ峯古墳発掘調査

調査場所 坂出市加茂町鷺ノ口 6119ほか2筆  
調査期間 平成11年5月20日～平成11年7月19日  
調査面積 約64m<sup>2</sup>

### 1. 調査に至る経緯

坂出市の東南の丘陵である鶴ヶ峯は、山頂南の尾根に鶴ヶ峯古墳が位置しており、下方には仏願古墳群などの後期古墳群も位置する古墳造営地である。この付近の山林を所有する山橋建設株式会社は、昭和61年頃より当該地区の大規模開発を計画し、計画地内の古墳について、保存協議が行われ、仏願2号古墳と鶴ヶ峯古墳が現状保存されることとなった。今年に入り、この開発地内での採土計画が予定され、山林として保存されていた鶴ヶ峯古墳の位置する山頂尾根付近まで採土が及ぶ計画となった。前回の協議に従い、開発側も当初より鶴ヶ峯古墳を外した計画を進めており、については遺跡の詳細な範囲を知りたい旨の照会が平成11年5月25付けであった。鶴ヶ峯古墳は、以前の大規模開発時には山林としての残地部分に位置していたことから、古墳の範囲確認などは実施されないまま現状保存されてきたため、今回初めて古墳の範囲を確認した上で保存範囲を提示することとなった。

### 2. 遺跡の立地と環境

坂出市の東南に位置する鶴ヶ峯は、五色台山塊の西南に派生した丘陵の一つである蓮光寺山の南の山麓にあり、標高は山頂部で162.2mを測る。鶴ヶ峯古墳は山頂より南に緩やかに延びる尾根先端付近（標高156m）に位置しており、この古墳からやや西下方の標高82mの尾根上には、暗紋の入る土師器皿を出土した横穴式石室の鶴ヶ峯1号墳が確認されている。鶴ヶ峯古墳の位置する谷部や尾根筋にはほかにも杉尾神社南古墳や仏願古墳群などが立地していたが、大規模開発で仏願2号古墳と鶴ヶ峯古墳のみが現状保存されている。この丘陵から北の烏帽子山南谷筋までの地区には弥生時代から古墳時代にかけての墓域となっており、前期古墳は丘陵のやや高い位置に確認される傾向にある。

杉尾神社南古墳は鶴ヶ峯の北西の尾根上に築かれた竪穴式石室古墳であるが、遺物は鉄鏹のみの出土が伝えられている。大規模開発時の調査でも山頂へ至る尾根上の道に主体部の上面が露出しており、精査でも遺物は検出されなかった。ただ石室の掘り方の南に接して壺棺の下半部が検出され、この掘り方を切って竪穴式石室が築かれていることから、前期後半頃の築造と考えられる。またこの杉尾神社南古墳より下方には、西に延びる尾根筋があり、この尾根先端付近にも箱式石棺が露出しており、この石棺に接して方形周溝状遺構が確認されている。方形周溝状遺構の中央部に土坑墓が確認され、弥生時代後期頃の高环が出土したことから、この時期の方形周溝状遺構の後に箱式石棺が作られたと考えられる。

また南に谷を挟んだ尾根の南斜面には仏願2号墳が南に開口し、南の谷奥には仏願1号墳が立地していた。仏願1号墳は玄室と羨道との間に間仕切り石があり、複室類似構造を呈していた。仏願1号墳は6世紀頃の築造と考えられ、2号墳はそれよりも後れて築造されたものと考えられている。2号墳では平安末から中世にかけての遺物が残されており、石室の再利用が確認されている。



1. 鶴ヶ峯山頂古墳
2. 鶴ヶ峯1号古墳
3. 仏願1号古墳
4. 仏願2号古墳
5. 骨壺出土地
6. 杉尾神社南古墳
7. 杉尾神社南尾根遺跡
8. 杉尾神社東組合石棺
9. お宮山古墳

Fig.1 鶴ヶ峯古墳周辺遺跡位置図

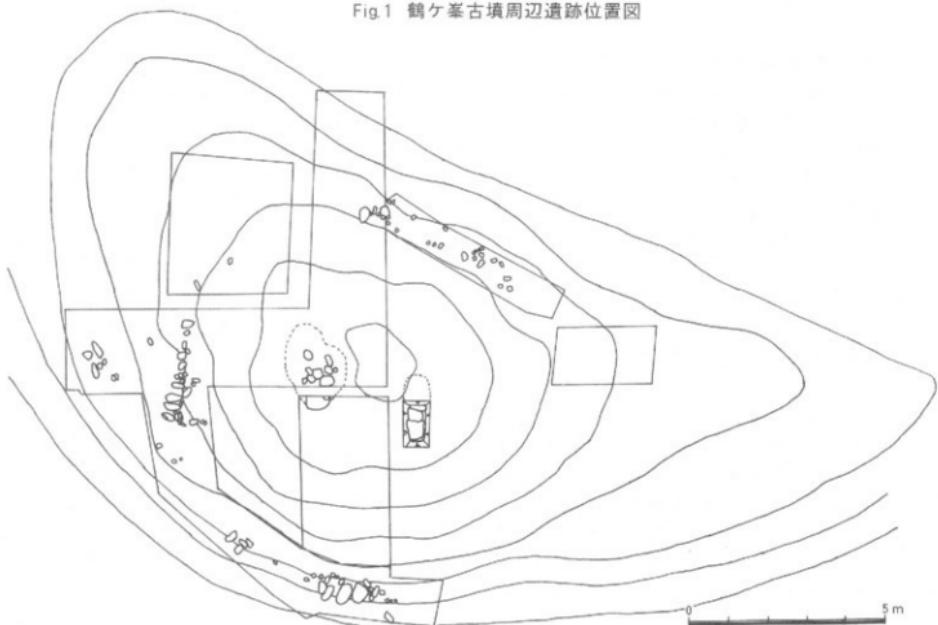


Fig.2 墓丘測量図

### 3. 調査状況

鶴ヶ峯古墳は山頂から南に延びた尾根先端に位置するが、低いマウンドのため伐採後でも自然地形との区別がつきにくい古墳であった。このため、平板測量後、古墳頂上部と考えられる部分に十字のトレーニングを設定し、表土を剥ぎながら精査を行った。

トレーニングは幅2mで下方の谷部に向けて設定し、南、東、北部分については、明らかな傾斜変換点まで精査を行った。以下各トレーニング状況について記す。

西トレーニングは西の尾根部から谷筋へ傾斜する地点である。腐植土を除去して精査を行ったが墳頂より西約4~4.5m付近に小礫が幾つか並ぶのが検出された以外、明瞭な境界を示す遺構は確認されなかつた。

南トレーニングは伐採当初から露出していた柱状の花崗岩が並ぶ部分を含めて精査を行った。露出する柱状花崗岩は途中から小形の礫にかわりながら西トレーニングに向かって円弧を描き消滅する。更に南の傾斜変換点付近でも板状安山岩が幾つか検出されたが、斜めに埋没した、散乱しており、原位置は保っていないものと推察される。

東トレーニングでも傾斜変換点のやや上方で安山岩塊が並んで露出しており、石自体は浮いた状態に近いものであった。

北トレーニングも傾斜変換点付近に小礫が散在しており、西トレーニングに向けてトレーニングを拡張したところ、同じように小礫が流れこんでおり、そのまま谷部へ落ちていく地形となっている。

トレーニングから明確な古墳の裾部を示す遺構は礫以外にないことから、地形の傾斜変換点と礫が集中する部分を含めた範囲を古墳の範囲とした。このことから、鶴ヶ峯古墳は直径約11mほどの円墳であると考えられる。

### 4. 主体部状況

鶴ヶ峯古墳の主体部の位置は、墳頂部のトレーニングで確認された。古墳のほぼ中央で腐植土中に安山岩の板石が集中して検出されたことから、主体部の蓋石であることが推察された。その範囲もあり広くなく楕円状となることから、箱式石棺などの埋葬施設である可能性が高い。更に墳頂周辺のピンボールによる差し込み調査から、主体部のやや北寄りにも安山岩の板石が並ぶことが確認され、箱式石棺などの蓋石であると推察される。

墳頂部の第1主体部は石棺蓋石が腐植土中に露出していることから、山頂一帯を含む開墾等によって封土が除去され、主体部の一部が露出したものと考えられる。これ以上の内部調査は実施していないが、盗掘などにあっている可能性も考えられる。もう一方の第2主体部については、封土下約30~50cmで蓋石が検出されていることから、内部は良好に保たれているものと推察される。

### 5. まとめ

鶴ヶ峯古墳は、下方の後期古墳である仏願古墳に先行する前期古墳として山頂近くに立地しており、内部が未調査のため、詳細な時期は不明であるが、杉尾神社南尾根古墳の横で発見された壺棺が唯一同時代の遺構ではないかと考えられる。同規模の古墳としては、綾川対岸に位置する弘法寺古墳が時期的には近いものと考えられ、内部主体も堅穴式石室でないことなど類似があるかもしれない。綾川西岸の弘法寺古墳に対応するかたちで、綾川東岸に鶴ヶ峯古墳が立地するものと考えると、両者の被葬者の性格も伺えるように思われる。

鶴ヶ峯古墳



写真 1 調査前状況



写真 2 調査作業状況



写真 3 西トレンチ精査状況

鶴ヶ峯古墳



写真4　南トレンチ列石状況



写真5　南トレンチ列石状況



写真6　東トレンチ列石検出状況

鶴ヶ峯古墳



写真 7 東トレンチ列石精査状況



写真 8 第一主体部検出状況



写真 9 第一主体部検出状況

鶴ヶ峯古墳



写真10 第一主体部検出状況

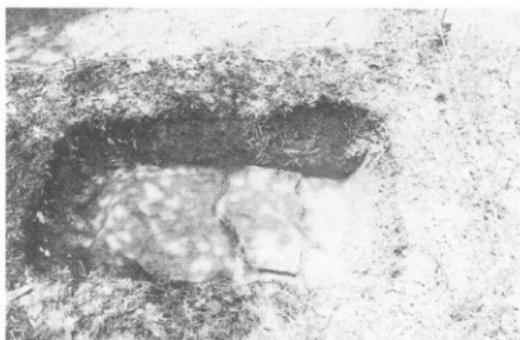


写真11 第二主体部検出状況



写真12 第二主体部精査状況

### 第三章 讃岐国府跡発掘調査

調査場所 坂出市府中町字本村5013-3（岡野宅）

調査期間 平成11年7月21日～平成11年9月28日

調査面積 約125m<sup>2</sup>

#### 1. 調査に至る経緯

平成11年6月、開法寺池の東の水田にて個人住宅を建設する計画の照会があった。当該地は讃岐国府跡の範囲内であることから、周知の遺跡の範囲内での開発行為となり文化財保護法の届出が必要になるとともに、事前の確認調査を実施する必要があることを回答する。また、鶴ヶ峯古墳の調査を開始する予定のため、それ以降となることを説明する。工事は水田耕作の後の秋頃になるとのことなので、その前頃には調査を実施できるとした。

ところが、建設予定が早まり夏頃には着手したい旨の連絡を受けたことから、急遽届出等を提出してもらうと共に、古墳の調査が一次調査で完了した時点をもって、讃岐国府跡の調査を実施することとした。

#### 2. 遺跡の立地と環境

当該地は讃岐国府跡内の南西地区に位置し、すぐ西には鼓ヶ丘丘陵と南の尾根との間に形成された谷部が抜がっており、現在は開法寺池となっている。讃岐国府跡は城山東麓に開けた水田地帯に比定されているが、その範囲は綾川の流路より西の地帯に相当し、讃岐国分寺から綾坂を抜けて鼓ヶ丘丘陵の北に到る古道を中心方八町、方六町など幾つかの範囲が推定されている。

国府域の西には城山が位置し、その東麓丘陵頂上部には白砂古墳、タイバイ山古墳の2基の前方後円古墳が立地する。両墳とも盛土古墳でその前方部が城山明神原に向けて造営されていることから、頂上部にあたる古代祭祀跡の明神原遺跡との関連が推察されている。

後期古墳は白砂古墳の北の谷筋に本村古墳群が確認されている。本村2号古墳は既にゴルフ場として造成されて消滅したが、造成以前の状況は羨道部と天井部が削平された横穴式石室墳であった。調査では埋葬当時の遺物は出土せず、後世の平安末から中世頃に再利用された際の遺物が発見されたのみである。また現在も保存される横穴式石室墳としは、本村荒神古墳があり、内部から完形の須恵器、土師器の他、ミニチュア須恵器や鉄鎌、鉄鍊、土玉など多くの副葬品が出土し、6世紀末から7世紀頃の造営と考えられるが、後世にも利用されており、上層には平安時代の甕を合わせた棺のほか、13世紀頃の輸入青磁を伴う土師質土器も検出されている。国府域の東南には、綾川を挟んで新宮古墳が南の低丘陵上に造られており、副室構造をもつ市内第2の規模をもつ巨石古墳として有名である。出土遺物から7世紀頃の古墳と考えられており、地方豪族が古墳造営から寺院建造へと移る例として、開法寺と関連付けられて語られる古墳である。

古代の遺跡としては、国府域南西角付近に開法寺塔跡が確認されている。塔跡は白鳳時代の創建と考えられる古代寺院で法起寺式伽藍配置をとると考えられている。凝灰岩切り石の壇上積み基壇をもち、県下でも例をみない貴重な遺跡である。また、開法寺出土瓦と同范の瓦は鶴廃寺からも出土しており、両寺とも当地を治めていたとされる綾氏が造営した古代寺院と考え



Fig.3 周辺遺跡位置図

1. 講岐國府跡
2. 開法寺塔跡
3. 新宮古墳
4. 安樂寺跡
5. 妙楽寺跡
6. 仏頭古墳群
7. サギノクチ古墳群
8. 橋ノ本遺跡
9. 山ノ神古墳群
10. 鴨鹿寺
11. 線機塚（穴薬師古墳）
12. 烏帽子山遺跡
13. 明神原遺跡
14. 白砂古墳
15. 荒神古墳
16. タイバイ山古墳
17. 弘法寺古墳
18. 王塚古墳
19. 醒醐寺跡
20. 醒醐古墳群
21. 別宮古墳群
22. 城山城址
23. 弥栄古墳群



調査位置調査地図

番号	地名・調査時期	特記
1	新宮町 0.5.9.-12	平安時代後半の豪族の居館。 近傍に、新宮古墳が位置する。
2	鶴鳴町 1.1.8.-2	平安時代後半から近世の遺跡。
3	鶴鳴町 1.1.8.-2	平安時代後半から近世の遺跡。
4	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
5	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
6	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
7	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
8	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
9	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
10	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
11	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
12	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
13	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
14	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
15	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
16	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
17	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
18	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
19	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
20	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
21	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。
22	鶴鳴町 1.1.7.-12	平安時代後半から近世の遺跡。

Fig.4 講岐國府跡調査位置図

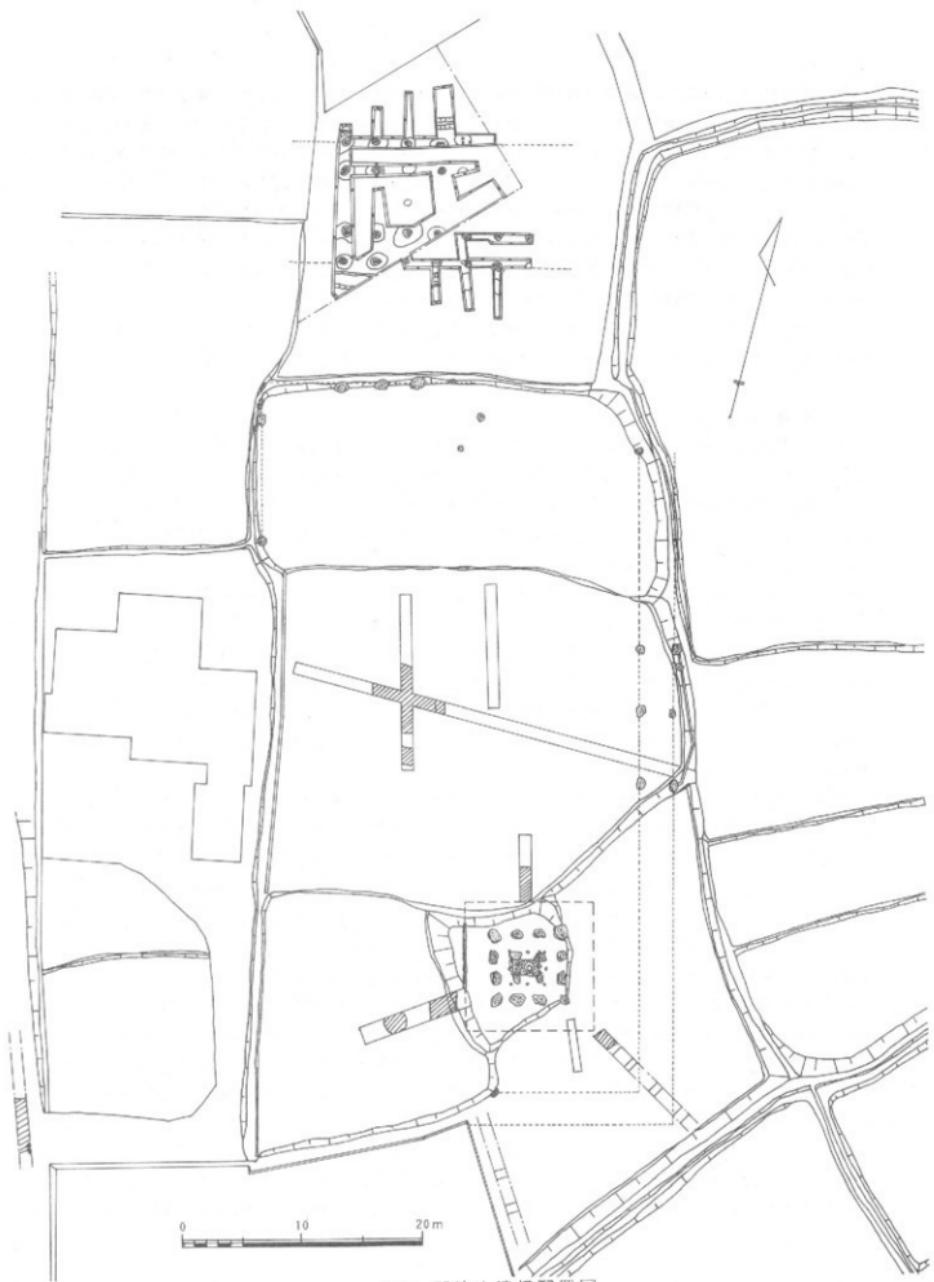


Fig.5 開法寺遺構配置図

られている。

讃岐国府跡は、坂出市の府中町本村付近に比定されて後、昭和52年から発掘調査が開始され、その後香川県教育委員会の5ヶ年にわたる範囲確認調査が実施されたものの、その中心については不明となっている。この調査以降、坂出市教育委員会は国府域での個人住宅建設に伴う調査を継続して実施しているものの、国府中心施設を示す遺構・遺物の発見までには至っていない。ただし、国府関連施設と推定される遺構は、昭和54年に香川県教育委員会によって総柱の掘建柱建物が発見され、倉庫跡ではないかと考えられており、また、築地塀跡と考えられる遺構も発見されている。市教委の小規模調査でも倉庫跡付近の調査から隅丸方形のピットが検出され、この倉庫跡付近の水田一帯に比較的良好な遺構が残されている可能性が考えられる。他の地点においても、遺構が確認されているが、その多くが平安末頃から中世にかけての遺構・遺物を中心としており、創建期の国府の所在などは未だ不明となっている。

### 3. 調査状況

調査は一筆の水田の一部を宅地に造成することから、宅地予定地の南境界に沿って幅約2mのトレンチを設定して遺物・遺構の有無の確認を開始した。重機掘削にて表土である耕作土と下層の乳灰色粘質土を除去した後、暗黒褐色の遺物包含層が検出された。この包含層と同じ検出面にて安山岩の平石が2箇所ほど確認されたが、明確な並びではこの時点では確認できなかった。引き続き、用地の西部分にて南北方向に幅1mほどのトレンチを設定して掘削したところ、ここでは花崗岩・安山岩などの石が検出され、南北に並ぶことが確認された。このことから、南北の石列に直交するかたちで、先のトレンチを精査したところ、新たな石が調査用地の境にて発見され、明らかに対応する並びであることが確認された。これにより、南北トレンチの各石に直交するように小トレンチを配したところ、東西に幾つかの石が次々と並ぶことが確認された。明らかに何らかの建造物の礎石であることが推察されたが、調査用地外に及ぶ規模を有していることや、礎石の一部が東部分で消滅していることなどから、その性格は不明な点が多くあった。

調査地内にかなりの数の礎石群が検出されたことと、その深さが非常に浅いことから、住宅建設に伴う基礎の掘削と遺構の深度が問題となった。また包含層中に含まれる遺物の大半が古瓦片であることから、南方に位置する開法寺塔跡との関係が推察され、開法寺遺跡の一部であるなら、古代寺院に伴う礎石遺構がほぼ良好な状態で残されている貴重な遺跡であること考えられた。このため、香川県教育委員会に速やかに連絡し、今後の調査方法や開発計画との調整を図った。香川県教育委員会からは、遺構の性格をより明確にせよとの指導があり、地権者と協議の上、開発用地外にも更にトレンチを配し、遺構の広がりを調査することとなった。

調査区東部分に設定したトレンチでは遺構は確認されず、南東部に設定したトレンチでは、礎石に対応する位置に更に礎石群が並ぶことが確認され、更に拡大した調査区外に延びていると推察された。また、礎石よりやや南に瓦溜まりが東西方向に延びており、調査区西南角で検出された瓦溜まりに対応する方向をもち、浅く溝状に窪むことから雨落ち溝の可能性も考えられた。

調査で検出した礎石跡は全部で24ヶ所であり、このうち礎石は20ヶ所で残存しており、4箇所は抜き取り跡、または掘方として確認された。南北に設定したトレンチから、検出礎石よりも更に南北に延びる礎石の存在の可能性はなくなったが、西方向に隣地家屋部分に更に石

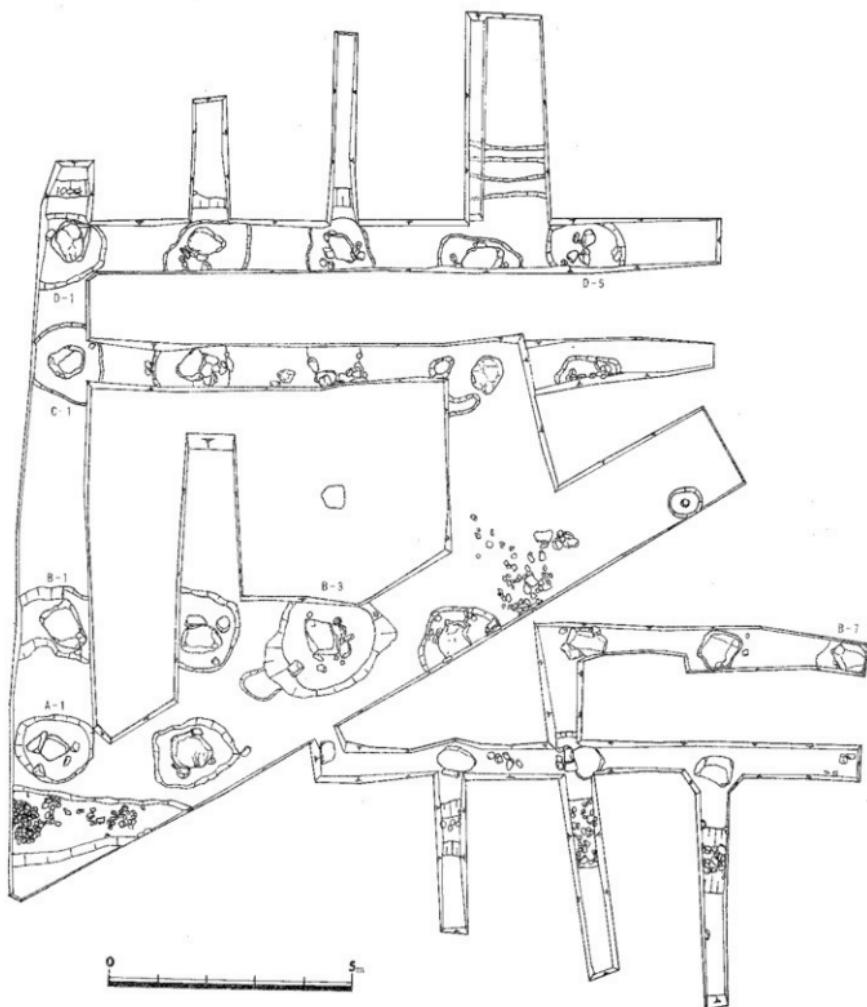


Fig. 6 基 石 配 置 図

が延びることが確認され、東部分については畠地であったことから、これ以上の確認はできなかつた。調査では南北の中央がやや広い3間の、東西6間以上の長い構造物であると考えられ開法寺塔跡の北約70m付近に位置することと、直ぐ南に推定される講堂との高低差がやや高いことから、従来の伽藍推定域の更に北地区に位置すると考えられ、建物構造として中央部に共同の空間をもち、南北に東西に並ぶ小室をもつ僧坊などが推察された。

また、礎石掘方の調査から、東部分で更に下層に柱穴が存在することが確認され、礎石建造物以前にも何らかの遺構が存在した可能性も推察されたが、礎石遺構面の保存や調査期間などから下層遺構の検出までは至っていない。

#### 4. 磂石状況

調査区にて確認された礎石群及びその抜き取り跡は全部で24ヶ所であった。便宜上、南北方向の礎石をA～Dとし、東西に並ぶ礎石に1～7の番号付して説明する。

礎石群は南北にA～Dの4個が並び、東西方向はB列で最長7個の礎石が確認されており、更に東西にそれぞれ延びることも推察された。南北方向の礎石間隔はA B、C D間で約2.5mとなり、中央部であるB C間は広く5m間隔となっている。東西方向の礎石は約2.6m間隔で配されており、南北3間、東西6間以上の構造となる建造物であったと考えられる。調査後の埋め戻しの際に、B C間の廃土の下を一部掘削を施したところ、薄い平石が確認され束石であると考えられるものも確認された。

北部のトレンチでは、礎石より更に北では遺物包含層が厚く堆積していたが、礎石が延びる可能性はなく、抜き取り跡も確認されなかつた。南部についても、礎石南に瓦溜まりが位置する以外、礎石が更に南に延びることはなく、南北は3間、梁間3間と考えられるものの、建物構造からすると、西端部が未検出であるが、南北は4間の構造となる可能性が考えられる。

大半の礎石の周囲にて礎石掘方が確認されたが、特にB 3では礎石北に接して礎石上面とほぼ同じレベルに土師質楕1点が置かれており、上部は椭円形の砂岩で密封するような状態で出土している。また掘方は他の礎石群の中でも大きく、掘方内に方形の白色凝灰岩が混入しており、この白色凝灰岩の表面には刺突された小穴が円形に巡っており、裏面、側面には鑿跡も残ることから、寺院内の何らかの装飾物などであった可能性があり、破損した一部が掘方内に投入されたものと考えられる。同種の白色凝灰岩の小塊は他の掘方でも出土しており、礎石の詰め石として利用されている。

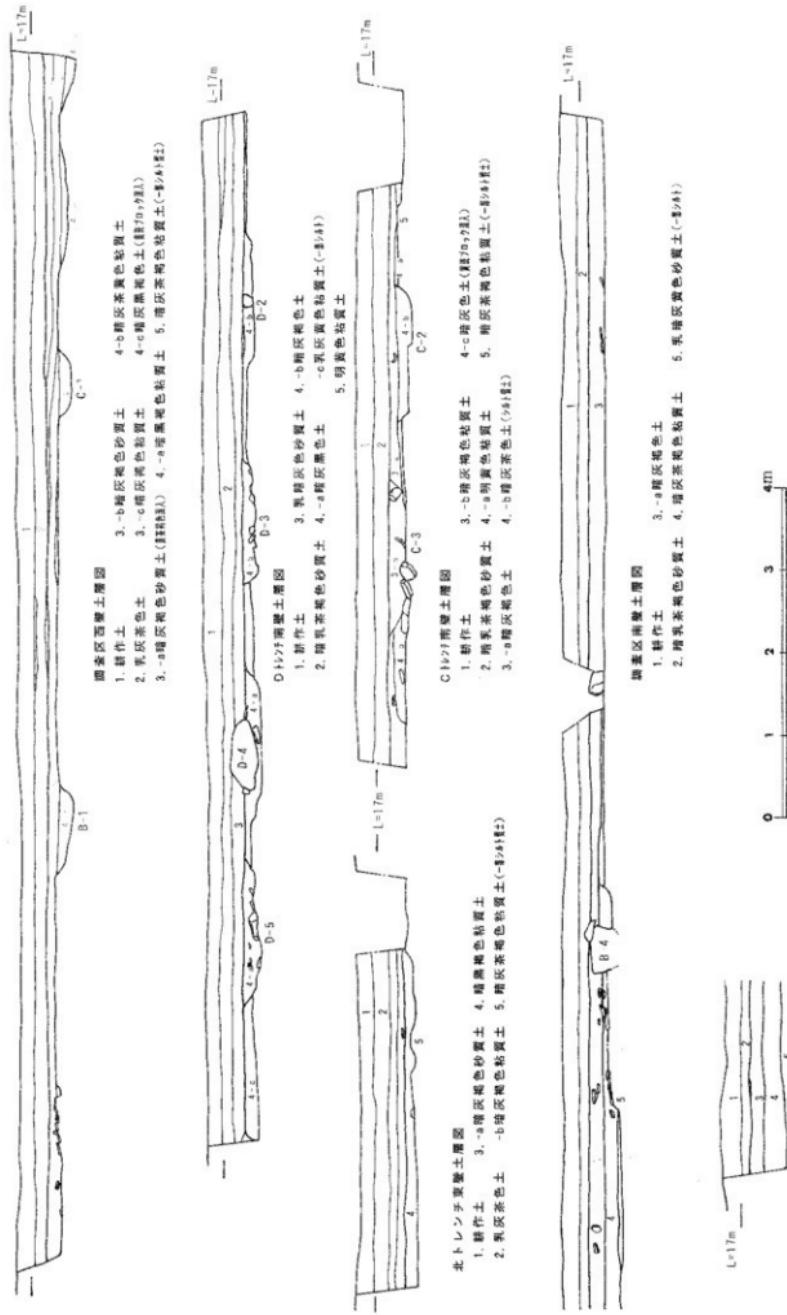
礎石は花崗岩と安山岩を石材として用いており、上面は水平になったものが多く利用されている。但し、安山岩礎石の幾つかは窪んでいたり、凹凸が著しいものも利用されている。礎石レベルは若干の高低差があるものの、標高17m付近でほぼ水平に設置されている。

#### 5. 調査区土層

調査区の土層は遺構が非常に浅い深度にあったが、大別して5層分けられた。

第1層は現在の表土である水田の耕作土で、厚さ約20cmではほぼ均等に堆積している。第2層は乳灰色粘質土で厚さ約20cmで調査区に拡がる。第3層は暗褐色土褐色を基調とした遺物包含層で、礎石上面はほぼこの第3層検出面に一致している。第3層は北部で2層に分層され、上層は砂質土で下層は粘質土となる。第4層は南壁東部で確認される暗灰茶褐色土を基調としたもので、礎石掘方埋土もほぼこの第4層の類似層である。北部では褐色よりも黒色が強くなり

図7 調査区土層図



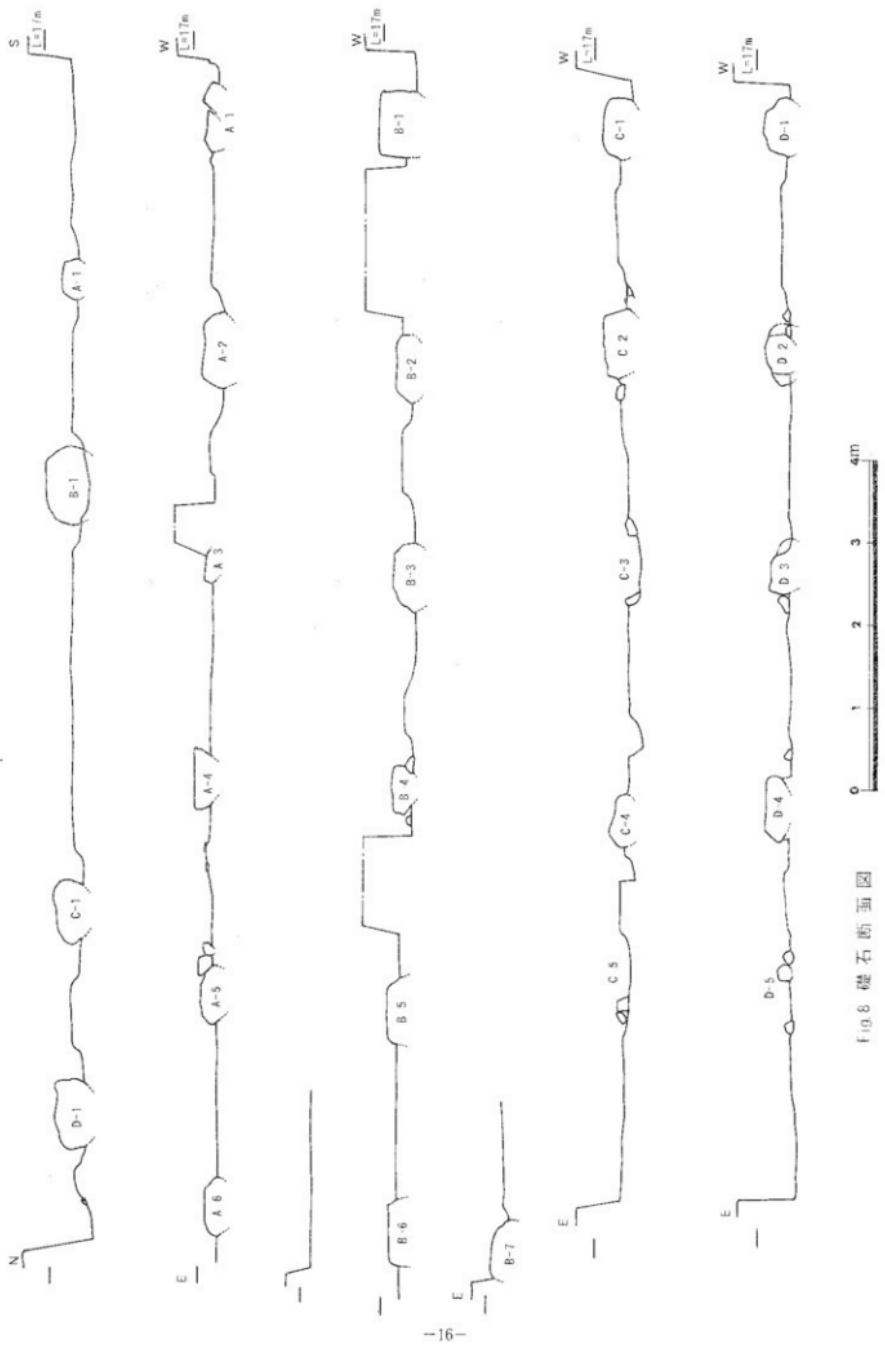


Fig. 8 硅石断面图

暗黒褐色粘質土となり、土器などの日常遺物もこの層に多く含まれていた。C、D礎石などの付近ではやや異なり、明黄色粘質土や暗灰色土に明黄色粘質土が混入する層が認められる。第5層は場所により色調は異なるが、全体にシルト質の層となり暗灰色、明黄色といった色調となる。寺院建造物造成のためまた前代の遺構が存在したことから、整地などが隨時行われた可能性を考えられるが、土層面で明確な造成層を確認するにはいたっていない。

出土遺物は少ないが、第3層が11世紀から12世紀頃と考えられ、第4層は9世紀から10世紀頃の堆積と推察される。第2層以上それ以降となり、第5層は平安時代以前と推察される。

## 6. 出土遺物

調査区からは礎石とともに大量の瓦片が出土しているが、土器片などは礎石周辺では以外と少なく、北側のトレーナーの包含層にてやや多くの土器片が出土している。なかでも、礎石掘方内から瓦頭が2点出土しており、掘方内出土の土器片とともに重要と考えられる。

1～3は第3層包含層にて出土した羽釜片である。4はB3掘方にて礎石横に置かれていた土師質楕である。楕上面に梢円形の砂岩を乗せて蓋をしたような状態で出土した。5～16は第4層包含層にて出土したもので、13～15は内面が内黒の黒色土器である。10と12は土師質の托と考えられる土器で、特に12はD5掘方内にて出土しており中央部に穿孔がある。

17～21は出土した軒瓦である。17は八葉素弁蓮華文軒丸瓦でわずかに盛り上がる素弁に1+8の蓮子を中房にもち、三角縁の周縁に鋸歯文を巡らしている。18は八葉單弁蓮華文軒丸瓦で中房部分の磨滅が著しく蓮子などは不明であるが、過去に出土したものから1+4の蓮子であると考えられる。単弁八葉の周囲にハの字形に珠文を巡らし、周辺は波形の線が緩くめぐる。同范例は讃岐国分寺、国分尼寺にて出土している。19は六葉單弁蓮華文軒丸瓦で1+6の蓮子を中房にもち、3つに割った子葉を単弁にもち、間弁には菱の実状のものを置く。類似例は法勲寺タイプのものがあるが、法勲寺のものは周囲に鋸歯文を巡らすが、本例では鋸歯文が無いタイプとなっている。20は八葉複弁蓮華文軒丸瓦で1+8の蓮子を中房にもち、周囲に鋸歯文をめぐらす。21は均整唐草文軒平瓦であるが、唐草文は簡略化が進み本来の唐草の形状は崩れている。脇区に3つの珠文をもつ。

17～21は出土した軒瓦であるが、このうち18と21の平瓦がそれぞれ礎石掘方内より出土している。18はB1礎石掘方から出土したものであり、礎石の下層にて表面を下にして出土した。21はB4礎石掘方内の端部から出土しており、遺構面に垂直にたつような状態で、表面を上にして出土した。B4礎石掘方のプランは明確でなく、すぐ東部分で瓦片の集中する層が検出されていることから、そちらに含まれる遺物である可能性も高い。19はC3付近の重機掘削中に出土したもので厳密な位置は不明となっているが、C3が礎石抜き取り跡として確認されたことから、抜き取られた包含層中に含まれていた可能性が高い。19はB4礎石掘方のすぐ東にて検出した瓦集中層にて出土したものである。また17はD2北端の浄化槽設置に伴うトレーナー内にて暗黒褐色土層にて出土したものである。

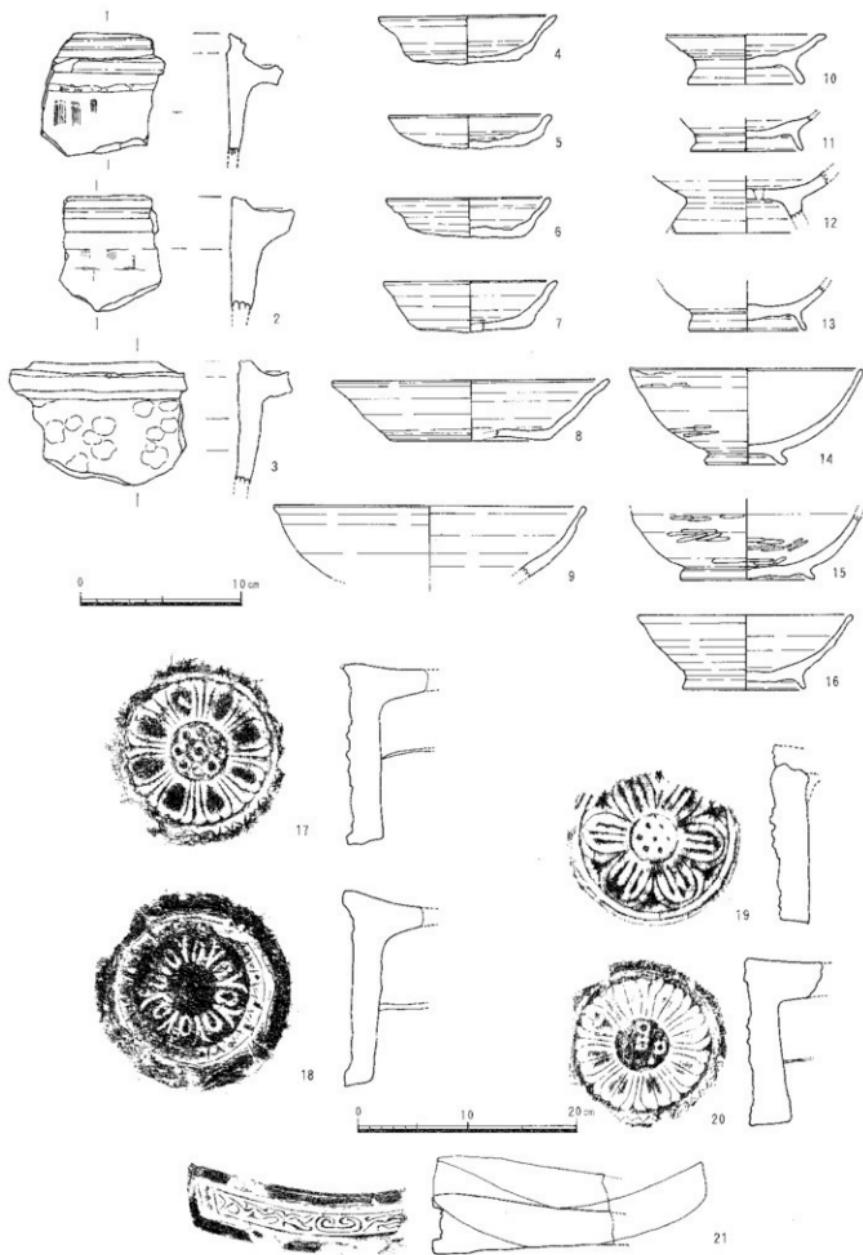


Fig.9 出土遺物実測図



写真 1 調査区遠景



写真 2 表土掘削状況



写真 3 磚石検出状況

讃岐国府跡5103-3



写真4 磐石検出状況 南北



写真5 B 3 磐石横出土土師賈椀

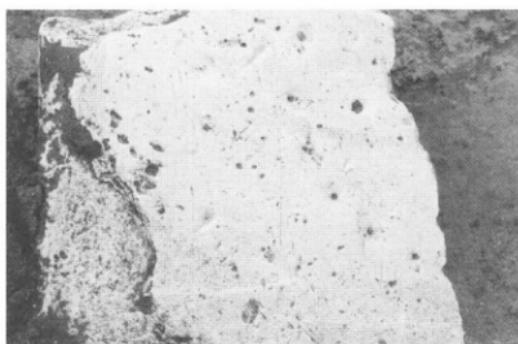


写真6 B 3 磐石横出土凝灰岩



写真7 南西角瓦集積状況



写真8 B 1 磁石掘方内瓦出土状況



写真9 B 1 磁石掘方内出土瓦

讃岐国府跡5103-3



写真10 B 4 磁石掘方内平瓦出土状況



写真11 B 4 東片出土状況

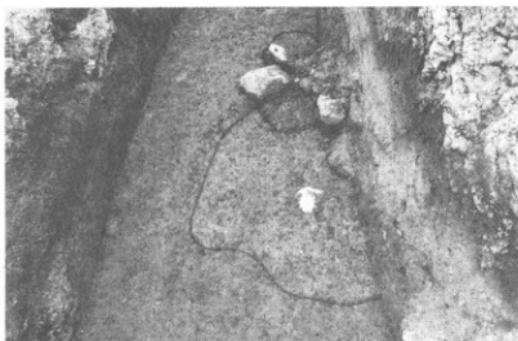


写真12 C 5 磁石抜き取り跡

讃岐国府跡5103-3



写真13 検出礎石全景



写真14 検出礎石全景



写真15 現地説明会風景

## 第Ⅳ章 讃岐国府跡発掘調査

調査場所 坂出市府中町字本村上所5061-2（大林宅）

調査期間 平成11年11月11日～平成11年12月10日

調査面積 約27.5m<sup>2</sup>

### 1. 調査に至る経緯

平成11年10月、讃岐国府跡碑のすぐ東に位置する大林実氏より、個人住宅建設の計画があることの連絡があり、事前に確認調査が必要であることを伝えた。また、讃岐国府跡の範囲内に位置する開発行為であることから、10月11日付けで57条の2の届出も提出された。

建設計画では、母家の東の納屋を取り壊して新築する予定となっており、納屋の撤去が終了した後に調査を開始することとした。

調査区は南北に長い敷地であることから、東西2.5m、南北1.1mのトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った。調査区の周囲の東と東南は一段低くなった水田と宅地となっており、平成7年にも個人住宅建設に伴い5060-3番地にて確認調査を実施している。その際の調査ではピットが数穴と溝状遺構が幾つか確認されたが、今回の調査区のすぐ東地区では、水田の削平からか遺構の残存状況は非常に悪いものであった。調査区は後世の盛土が施されており、この東地区よりも一段高くなっていることから、遺構が存在すれば、従来の調査区よりも良好ではないかと推察された。

### 2. 遺跡の立地と環境

讃岐国府跡は坂出市の府中町本村付近を中心に比定されている官衙跡であり、綾川が南から東へとその流路をかえながら更に北西へと流れる付近に位置しており、西は城山で遮られた矩形の水田地帯である。

周辺の代表的な遺跡としては、西に聳える城山の東麓丘陵の頂上部に古墳時代前期の前方後円古墳である白砂古墳、タイバイ山古墳が立地する。両墳とも内部など未調査であるが、墳丘測量等は実施されて紹介されている。両者墳ともその前方部を城山の明神原に向けて築かれており、明神原が延喜式内大社である城山神社の旧地であり、また古代祭祀遺跡でもあったことから、更に遡って古墳時代にも明神原と何らかの関連があったのではないかと推察されてもいる。後期古墳については、綾川を挟んだ東方の丘陵上に巨石墳である新宮古墳が造営され、また白砂古墳の位置する丘陵東の谷筋に本村古墳群が造営されている。本村古墳群の幾つかは崩壊したり、ゴルフ場の開発に伴い消滅したものもある。ゴルフ場内に保存された本村荒神古墳は、須恵器、土師器の他、ミニチュア須恵器や鉄鎌、鉄鎌、土玉など多くの副葬品が残されており、6世紀末から7世紀頃の造営と考えられている。

古代になると国府域に隣接または含まれる形で古代寺院開法寺が造られたと考えられる。現在、開法寺は塔跡が確認されて県指定となっている。開法寺の伽藍配置は法起寺式と推察されているが塔跡以外の遺構の詳細は未調査であった。今年度の7月に開始した府中町5013番地の確認調査で、塔跡北60m付近での東西方向の礎石群が検出されたことで、伽藍配置やその位置からして僧坊の可能性が高い遺構であると考えられている。開法寺は国府に付属する国府寺の性格を帯びた古代寺院と考えられ、その範囲が明確になるに従い、国府政府等の位置も

より限定されていくものと思われる。同時代の古代寺院としては、開法寺の北東、綾川の東に位置する烏帽子山南麓に鴨廃寺の塔心礎が残されており、周辺から出土する瓦は開法寺出土のものと同範囲にある。両寺院跡とも付近に巨石墳が前時代に造営されており、古代豪族の綾氏との関係が推察され、開法寺は官寺として、鴨廃寺は氏寺として、綾氏が造営したのではないかとも考えられている。

国府域西に聳える城山の山頂一帯には、石壘・土壘が主に残る古代山城跡である史跡城山が位置している。城山は標高462mの頂上部から標高300m付近までが、緩やかな高原状を呈しており、標高300m付近以下が急斜面となっている。土壘はこの300m付近に外郭として土壘が巡り、山全体を囲むように築かれている。内郭は城山の水源地である池ノ内盆地の西部分を囲むように石壘で築かれしており、谷部には水口が残り、尾根部の高所には城門跡も残されている。山頂には望楼跡と呼ばれ、礎石群が残されているものの、明確な並びを持つ礎石は数個で、南斜面に付近に礎石大の安山岩が集積している箇所もあり、後世に動かされたものと考えられる。石造遺物として、城山にはホロソ石・マナイタ石・カガミ石といった加工物が、点在しており、これらが組み合わされて門礎となると推察してきた。近年、対岸の岡山の鬼ノ城の調査で城門が発見され、その部分に城山でいうホロソ石・マナイタ石等の石が一体に組み合わされて門柱を設置する状態で発見されたことから、城山の場合も同様の目的で設置されたものであったと考えられるが、城山のホロソ石等は城門に据え付けられた状態では残されておらず、サルブチ滝のホロソ石などは、制作途中で放棄されている。他の石も山中に散在しており、むしろ製作途中か設置前の状態と推察される。

城山の大規模な発掘調査は実施されておらず、遺物等は耕作等による偶然の出土物が知られるのみであるが、遺物の出土地点は池ノ内盆地の斜面部から須恵器平瓶が、また現在の飯山町に属する山頂南の緩斜面部の坂本バエと呼ばれる地点から須恵器环や土師器などが出土しているほか、山頂部の東地点で奈良、平安時代頃の遺物小片が出土しているのみである。

平成10年度の城山の調査は主として水口部分を中心とした石壘の実測であったが、一部石壘基底部の調査のためトレンチを施したが、その結果土壘の基底部に列石が並ぶことが確認され、外郭の土壘基底部にも列石が配されている可能性が高くなった。

城山の築造時期は不明な点が多いが、通常は日本書紀に記された屋嶋の城と同時期に整備されたものと理解されているが、更に遡って築造されていたものでないかとの考えもある。現在確認されている出土遺物では7世紀後半頃のものと考えられる。

平安時代には国司として菅原道真が国司として赴任しており、讃岐の大旱魃の際、城山明神原に上り、城山の神に降雨を祈ったとされ、その地は安山岩の巨石が露出する明神原の頂上部付近といわれる。明神原は菅公が城山の神に祈った場所であることからもわかるように城山の神が下臨する場所であり、その依代として安山岩の巨石群が存在したと考えられる。城山神社の祭神は神櫛別命であり、古くから祭られていたと考えられ、もともとは古代祭祀の場であったと考えられる。この地の城山神社は正平十七年に細川頼之の白峰合戦の時に消失したと伝えられ、その後国府付近の印鑰の地に移され、印鑰大明神として祭られた後、現在の地に移ったと伝えられている。

国府が衰退した後、中世以降も国府域を中心に集落が存在しており、掘建柱跡建物や溝状遺構、井戸などが発見されている。その後、次第に水田化が進んでいったものと考えられる。

### 3. 調査状況

調査は南北に長い敷地内に、東西2.5m、南北11mのトレーナーを設定して遺構・遺物の確認を行った。調査地は標高1.6m付近に位置し、東側の水田とは約1mの比高差がある。

調査区は国府の石碑の東に位置し、石碑が建てられた周囲の水田より、道を挟んで一段低くなっている。昭和52年の調査から、この段差は古代から存在したものではないかとの考察が成されており、国府域の区画を考える上で重要な地形と考えられている。

調査は表土である納屋床部と旧耕作等を重機掘削し、下層の乳灰色粘土質土を除去した後、地表下約50cmで遺物包含層を検出した。遺物包含層は、南部で薄く、数センチで地山層である黄褐色粘土質土を検出した。北部に向かって遺物包含層が厚みを増し、約20cm下で地山を検出している。

遺構は調査区の西壁に沿ってSD01を検出した。南から北に向かって流れしており、比較的浅い溝である。幅は約40cmで深さは約5cm～10cmを測る。遺物は土師器小片り他、土鍋脚部などが出土している。

SK01は楕円形の土坑である。幅約60cm、長さ1mで、深さ20cmを測る。SK01はSX01と埋土上の切り合いではなく、同一遺構の可能性も考えられるが、SX01の細い溝を切ることから、別遺構と考えられる。遺物はSX01に集中しており、SK01では小片が幾つか検出されたのみである。

SX01は暗褐色粘土質土の埋土の遺構であるが、検出時点で上層に多量の土器片が集中しており、精査したところ土器溜まりの様相を呈した。遺物は全体に集中しているが、SK01とした部分については集中が希薄で、SX01は全体に浅い土坑であるが、SK01部分は一段低くなっている。SX01の土器集中を取り除いた下には、浅く細い溝状の窪みが検出され、SK01に切られたながらも、北部まで統いて消滅している。遺物の大半は土師質土器の楕であり、一括廃棄されたものと考えられる。

ST01は調査区北西端部で確認されたやや楕円形の土坑である。埋土はSX01などと同じである。検出時より完形に近い土器楕などが出土した。精査したところ、下層に丸みを帯びた15cmから20cm大の砂岩や安山岩、花崗岩などを敷き詰めており、中央部に形状からして人骨と推察される骨が検出された。

骨は頭部を北西にし、膝をおり、手を胸付近に挿えた状態で検出された。腹部中央に青磁楕1点と土師質楕1点、完形の小皿が2点と破片が数点検出されたほか、頭部西付近にも小皿片数点が検出された。また腹部の青磁楕にそって鉄製品1点も検出され、小刀と考えられる。

ST01は下層に川原石を敷き詰めた楕円形を呈するが、南部に土坑端部との間に地山と埋土の混入土が半円状に検出された。ST01検出付近の地山はSX01北部より徐々に深くなってしまっており、ST01のすぐ北部で上がるようになっており、東西方向の深い窪地となっている。

遺構はSD01と調査区中央部の浅いピット1穴が小礫混入土の同一埋土であり、SX01やST01などの埋土である暗褐色粘土層の上層に堆積していることから、時期的に新しい遺構であると考えられる。他のピットや不定形の溝状遺構などは全て暗褐色粘土層を埋土としており、同一時期の遺構と考えられる。柱穴などからは明確な建物配置が認められず、遺構の主軸も国府関連の主軸とは異なっており、国府遺構に直接関連するものとは考えられない。

#### 4. 出土遺物(図11)

調査区の遺物は遺構内出土のものが主体で、包含層中にも若干の遺物が含まれるもの的小片が大半である。1～8はS T 0 1出土遺物である。土師質小皿、壺、椀、輸入青磁碗などであり12世紀前半頃と考えられる。また鉄製の小刀1点も出土している。

9～13はS X 0 1出土遺物で、土師質壺、椀、土師器小型器台などが土坑内に一括して廃棄されており、10世紀末頃のものと考えられる。14～15はS D 0 1出土遺物である。土鍋体部や脚部が多く出土しており、15世紀から16世紀頃と考えられる。



- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1. 鷹崎園古墳群      | 13. 明神原遺跡   |
| 2. 開生寺塚跡       | 14. 白妙古墳    |
| 3. 新宮古墳        | 15. 宛空古墳    |
| 4. 安樂寺跡        | 16. タイハイ山古墳 |
| 5. 神奈川古墳群      | 17. 佐野古墳群   |
| 6. 伝説古墳群       | 18. 王堀古墳    |
| 7. サギノクサ古墳群    | 19. 旗頭寺跡    |
| 8. 磯ノ本遺跡       | 20. 旗頭古墳群   |
| 9. 山ノ神古墳群      | 21. 別宮古墳群   |
| 10. 網縄塚        | 22. 鶴山城址    |
| 11. 網縄塚(穴闌跡古墳) | 23. 伊東古墳群   |
| 12. 鳥帽子山遺跡     |             |



Fig. 10 調査位置図

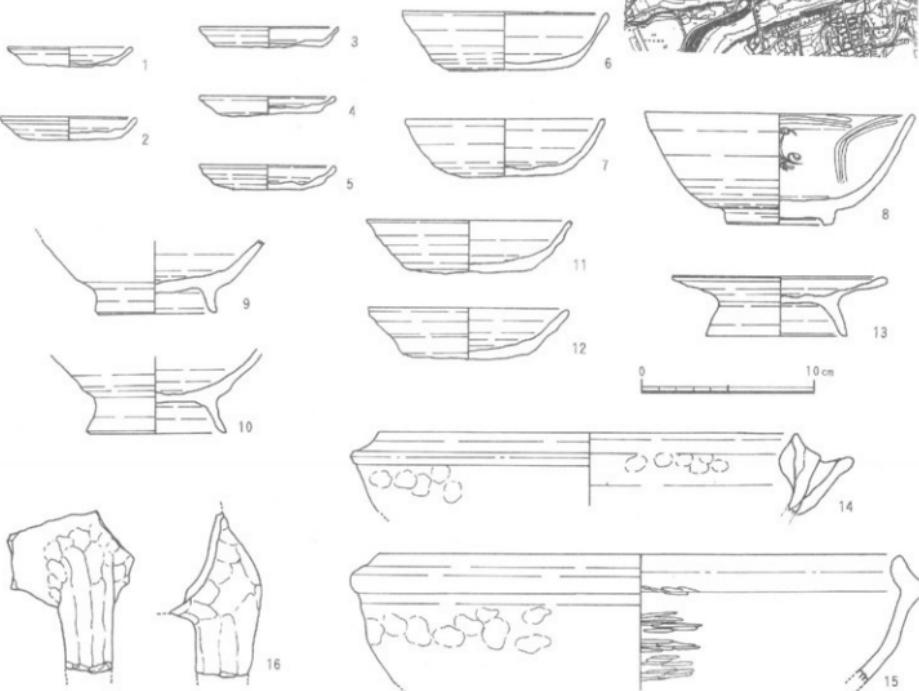
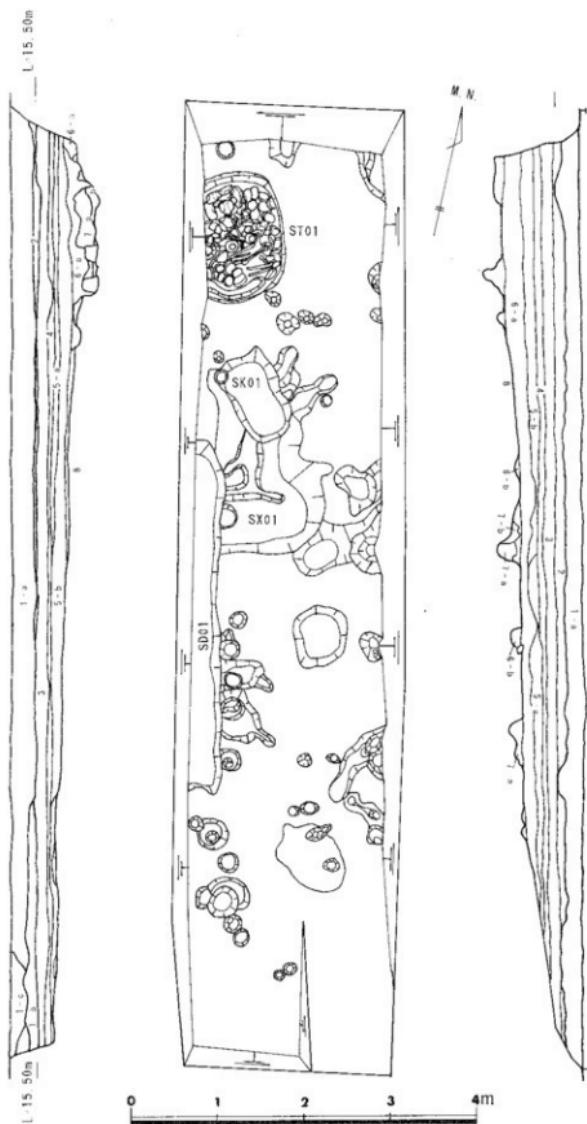


Fig. 11 出土遺物実測図



- |        |              |              |                    |
|--------|--------------|--------------|--------------------|
| 土層名    | 1-a 花崗土      | 3 乳灰茶褐色土     | 6.-a暗褐色粘質土         |
|        | -b 花崗土葉石混入土  | 4.茶褐色土(?)    | -b暗褐色シルト質土         |
|        | -c 旧耕作土花崗土混入 | 5.-a乳灰色小種混入土 | 7.-a暗褐色+黃茶色土       |
| 2 旧耕作土 |              | -b乳灰色硬混入土    | -b暗褐色炭化物混入土        |
|        |              |              | 8.黃褐色Mn+1cm種混入土(?) |

Fig. 12 遺構配置図・土層図



写真 1 調査区遠景

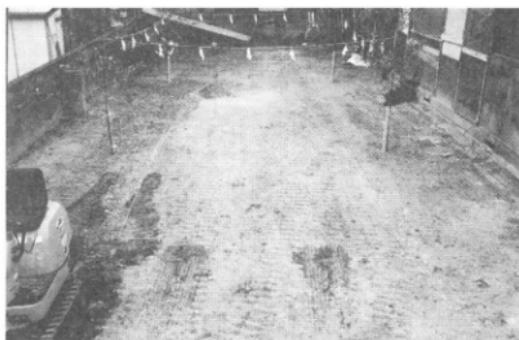


写真 2 調査前状況



写真 3 挖削作業状況



写真4 遺構検出状況



写真5 遺構検出状況



写真6 土層状況

讃岐国府跡5061-2



写真7 S X 0 1 土器溜まり状況

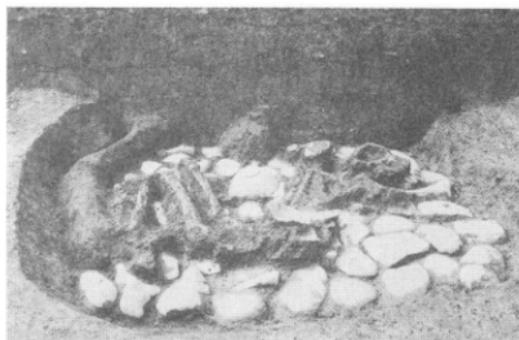


写真8 S X 0 1 土坑墓精査状況



写真9 S X 0 1 土坑墓内遺物状況

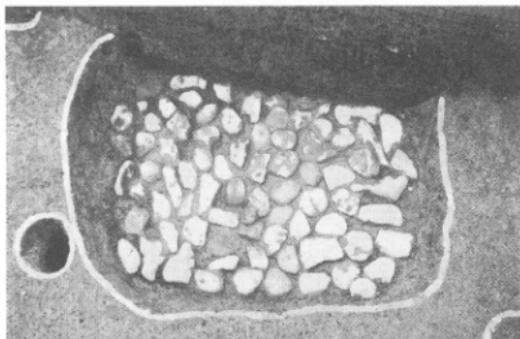


写真10 土坑墓下層状況

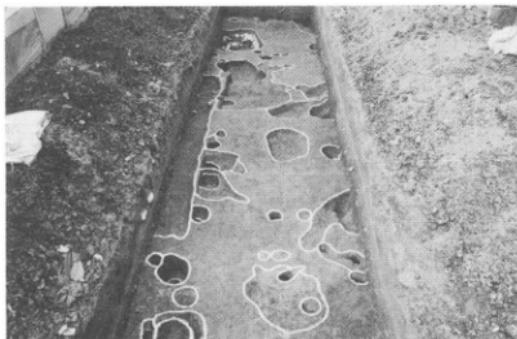


写真11 完掘状況



写真12 埋め戻し状況

## 第V章 ま　と　め

本年の坂出市内遺跡発掘調査事業は、鶴ヶ峯古墳と讃岐国府跡の2ヶ所を対象として調査を実施した。

鶴ヶ峯古墳は加茂町の大規模開発で現状保存となっていた古墳であり、当時、残地山林中に完全に残されることから、調査などは実施されていなかったものである。今年に入り、この残地山林の土砂採取計画が持ち上がり、鶴ヶ峯古墳の範囲確定の必要が生じたことから調査を実施することとなった。伐採後の状態では、古墳のマウンドは低く、明瞭な範囲は不明確であった。それでも東部分については、明らかに盛土と山林の自然傾斜とに相違が認められ、トレントでも付近に浮いた状態であったが列石も認められた。その他の方向については、緩やかな傾斜を呈しており、マウンドか自然地形か判然としない状況であった。トレント調査でも明確な境は認められなかったが、一部に小礫が円形に巡ることが確認されたことなどから、径約11m規模の円墳であると考えられた。土層については、尾根頂上部に位置していることから、マウンドの流出が認められ、また後世の開墾も一部に及んでいることから、明瞭な違いは確認できなかった。主体部については、頂上部で板石が散乱した状態で腐植土中に露出しており、その規模などから、箱式石棺などの埋葬施設と推察された。また、主体部やや北よりに東西方向に並ぶ安山岩板石が埴丘内に認められ、頂上部よりも良好な状態で発見された。このことから鶴ヶ峯古墳は2つの主体部をもつ円墳であり、内部など詳細は不明であるが、前期古墳の一つではないかと推察される。土砂採取については、古墳の範囲を外した計画とし、鶴ヶ峯古墳は現状保存されることとなった。

讃岐国府跡の調査は2件を実施したが、どちらも個人住宅建設に伴う確認調査であった。2件とも国府域の南地区での調査で、開法寺池の東地点と国府の石碑の東地区の2か所であった。開法寺池の東地点は府中町5103番3で、水田を造成して宅地とする計画であった。幅2m程のトレントで調査を開始した直後、安山岩などの平石が点在することが包含層上面で確認され、更にトレントを拡張したところ、矩形に整然と並ぶ礎石群であることが明らかとなつた。包含層中の遺物の大半が瓦片であることや、開法寺塔跡出土の軒丸瓦と同じものが出土したことから、開法寺に関連した造構であると考えられ、塔跡から推定されている法起寺式伽藍配置などから、伽藍の北部分に位置する僧坊跡ではないかと推察される遺構である。調査区と調査区外の拡張調査でも遺構は終了せず、更に東西に長く延びる遺構であると考えられる。この調査を契機として、開法寺遺跡全体の確認調査が計画されており、今後の調査によって予想されている伽藍配置の確認や地域の確定などが進められる予定である。

もう1件の府中町5061番2は、国府石碑のすぐ東に位置しており、周辺の調査では溝、柱穴などが確認されており、当該地も同様の遺構が検出されることが予想された。調査では南北に溝や小ピットが検出されたほか、土器溜まりや土坑墓なども確認された。大破は平安末から中世頃の遺構であり、土坑墓からは青磁の椀とり土師質椀や小皿が一括遺物として検出されたが、国府関連の遺構は確認されていない。国府の石碑の東部分は一段低い地形となっており、過去の調査ではこの段差は古代まで遡るものと推察されている。この段差の東地区や北地区には平安末から中世頃の遺構が抜がっているものの、創建期の国府関連遺構などは希薄である。国府関連遺構としては、倉庫跡や築地跡などから、国府の石碑の段差より西部で倉庫跡付近を中心とした北西地区の可能性が一つ考えられるのではないかと思われる。

ふりがな	さかいでしないいせき はっくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	坂出市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成12年度国庫補助事業							
巻次		シリーズ名			シリーズ番号			
編著者名	坂出市教育委員会							
編集機関	坂出市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒762-8601 香川県坂出市室町二丁目3番5号 TEL 0877-44-5026 EXT552							
発行年月日	2000年 3月 31日							
頁数	例言・目次等	本文	写真枚数	挿図枚数				
	4頁	34頁	39枚	12枚				
ふりがな	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因	
所収遺跡名	市町村	遺跡番号	○/○	○/○				
鶴ヶ峰古墳	坂出市加茂町 字蟹ノ口1619 ほか3筆	372030	3720-225	34度 17分48秒	133度 55分56秒	1999.5.20 ~1999.7.19.	64m <sup>2</sup>	採土事業に伴う確認調査
讃岐国府跡 (開法寺遺跡)	坂出市府中町 字本村5103-3 ほか1筆	372030	3720-239	34度 17分21秒	133度 55分11秒	1998.7.21 ~1999.9.28.	125m <sup>2</sup>	個人住宅建設に伴う調査
讃岐国府跡	坂出市府中町 字本村5061-2	372030	3720-239	34度 17分25秒	133度 55分15秒	1999.11.11. ~1999.12.10	27.5m <sup>2</sup>	個人住宅建設に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鶴ヶ峰古墳	古墳	古墳時代前期頃	箱式石棺2基	なし		低い墳丘の頂上部とやや北部で石棺を検出。頂上部は蓋石が露出しているが、他は盛土内にて発見されている。内部未調査。		
讃岐国府跡 (開法寺遺跡)	官衙跡 (武帳)	白鳳~平安時代	礎石建物	白鳳~平安頃の古瓦 須恵器・土師器・ほか		古代寺院開法寺塔跡北約60m付近にて発見された礎石建物。 伽藍配置等から僧坊跡と考えられる。		
讃岐国府跡	官衙跡	平安~中世頃	溝状遺構・柱穴 土坑墓・ 土器集中土坑	土師器碗・小皿 輸入磁器		古代末から中世にかけての柱穴 ・溝・土坑墓など。		

平成11年度国庫補助事業

坂出市内遺跡発掘調査事業

平成12年3月31日

編集・発行 坂出市教育委員会

坂出市室町二丁目3番5号